



東奥巢居著
淡海于當述

增註 桃青羽白彙

書林

宣英堂合
懷玉堂梓

序

榎の影とつふ人何れもふ牧の由を好むは好くとも
久しに遊んで其妙境を今もつらなるは木の葉も風を
起して人の家に花を結ぶのさざめきと何れに花を
其清き雪さうのかげんとつらぬおの月下は潮んと
しつとくくは定ふとくはるまはありかたつと
たふ人にも花を問ふ不き若くは問ふその中に由を
投てたる雀の影の形はよき葉のしつとくありと
そはつとくをたふと海の日徒世甘かたつとく

推して麻のあひくよま一菓子の子門下
是よりをふるん亦群言喻流通の趣も
さるに五燈の長光をかかへ人さるる
を一再向ふ人あは一字不説とさるん

湖南青雲石述

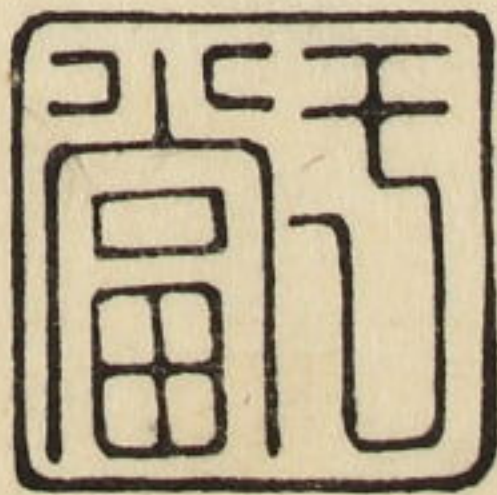


白序

葉と談を山と堂とまゝ枝を語と幹を悟と
ともかの芭蕉のたふ葉仰きまゝ高きみまゝ、
たうる色うは、一と勢みらの國乃葉疾其の
下即ち葉枕し、うらうら一也名形容と語
平、まゝに措のあゝ、葉の布帆のたうと
ひま、清ふとふ、桃青のねを、俳諧のま佛
山、生涯の句句を、世道のま葉なま、葉
唐らる傳ある、七百五十一の編とあり

予よもく〜〜の〜を拾ひ〜増は
〜の〜を〜は〜の〜の
履〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の
〜の〜の〜の〜の

寛政十戌年冬十月



凡例

一今よみ桃青翁句彙ハ〜より俳諧
句法の淺〜と〜の〜の
おも〜人の〜と〜の〜
〜の〜の〜の〜

一此註事物形名を解し句意ととの以餘語の
淺深い〜人の力も〜の〜の
小よみ〜の〜の〜

一倭漢の詩文すお語を引用中よ山家集
杜律とおやく〜の〜の〜

まじしんしんあまのつらふの詩この初初を
まじしんしんあまのつらふの詩この初初を
一
識者おきしんあまのつらふの詩この初初を
あつたん結ひし

増註桃青菴句彙

奥陽仙臺巢居註撰

淡海台麓予當増註

春之部

みやこ近きわたりよ年々を

春をよめる詩人のまゝな花乃

撰集抄云静園供奉は難波の浦に啜るを食と
あつた徳をかきしんあまのつらふの詩この初初を
非人の中よりわたりしんあまのつらふの詩この初初を

隱實舉狂云云

蓬萊一少もや 伊勢水も月夜

意法おや

六のちくも伊勢一も人おとら
たよりう神一さ茶柑子一那

元り一 田毎水日くそ 愚一も神

信州更科姨捨山有姨捨石其下有小菴其邊
水田より更科川千曲川落合所也東平鏡
臺山にあり中秋の月ハ鏡甚よく知る水田平
う川くを田毎の月とぞ初日作意又奇也

人れくめ方くもや 鏡水 裏水梅

墨梅詩 瘦損昭陽鏡裏春

よくく神ハあ川 水花咲垣根之那

静看細草却結實

山う川の垣根はうらの庵あ川を
くさくさちとくやうりや一あ

浅き水けりる菴あ

留まふあさる梅はへ余は水垣祿也

山家集

なみやく新神川一さ梅由へ
とみん人の心をかき一し歌

くんもやさるるあくは京太郎

のつひみちなる家とておん侍りけるあつしき
おろしきのぬいませぬまゝのききとて侍りける

梅の香りの川とりおとせぬ山後ふ

唐詩 初日照高林

み梅やえおろしけくれふとてお

梅聖俞紅梅詩 學粧如少女聚笑發丹唇

くめ柳 けおろしけくれふとてお

宋詩 真可塔芍藥未妨妃海棠

尾州美寺寺納

あき寺やもくぬか屋もくぬかの雨

大峯山寺の岩をぬく大僧正の寺

寺のついでなる寺のついでなる

もくぬか屋もくぬか屋もくぬか屋

又西り上人

あき寺やもくぬか屋もくぬかの雨

もくぬか屋もくぬか屋もくぬか屋

あき雨やあき雨あき雨川柳

後鳥羽院

あき雨やあき雨あき雨川柳

あき雨やあき雨あき雨川柳

あき雨やあき雨あき雨川柳

朗詠之 鑽^ル砂^ヲ草唯之分^ハ許^リ

蜺子因贅

蜺子ハ禪僧アリ魚鰕と漁^リシ^テ老母を喜^ビハ^シ人^ヲ喜^ス

きく魚や里を月を巧くはの細

左慵

蛎より架も海苔をくら老姑喜ぶやせ

山家集申おけし物とけさかひし何そと
とひりぬ蛤とわしつるけりしやうき

おねしういかをきけりしやうき

蛤より架も老姑喜ぶやせ

庄子画贅

角 ちね 俳 借 くらん 飛小蝶

莊子林希逸註云知此正莊子滑稽處姚察云
滑稽猶俳諧也心諧語滑利其智詐疾出故云
滑稽史記滑稽傳可參考

神海山をわくとも西行のそとをきく

増賀の信をよみし二句

何のよけ花ともきく茶白ひうね

西行よ

何事しれおろしきまはるしきねとも
けりしうきをきくなまはるしきねとも

裸々一鳥やうらまきあつたの嵐うら

隱逸傳増賀上人曰苦哉名利人樂哉乞兒人
撰集抄ぬを神宮詔宣ふより名利と捨るゝと云
たる衣敷をぬき傍をるゝ乞食をり捨るゝとせたまひて
裸々一鳥日枝の降りしけりてと云

古池や蛙とひらひら音

世説云孔稚圭風韻清疎門庭之内草萊不剪中
有蛙鳴稚圭云以是當兩部鼓吹
江湖集云耳聞不似心聞好歇却燈前半卷經
又曹溪録云過去之聲盡未來響不來終日確一
聲す麦水云此句は無形の珠の吟と時と一珠と
言外の余韻あり也いふ珠の句もは珠ありといふ

原中や物もはらひ鳴一雪在

山家集

雪在けりうらうら神田よとあひやゆりの
なうははらひてとてあめう那
雪在けりうらうらやとらうあ啼うりう

参岑詩下窺指高鳥俯聽聞驚風

高鳥の山うらう

又母はうらうら梨より遊一遊子の聲

慈銘和尚因果經のうらうら
かろくと啼い山をぬきうらうら
うらうらやうらうら母はてやあうん

秋鳥子教ふりり登蓮は沙の雨おふ表
うりてとふりハ其麻芒十寸穂芒芒穂
扱の芒ありそりおのい合まると

ま菴子桃さくく河梨門人
其角嵐をとり

雨のふ子 桃ととも九くやまの餅

桜の艶子もふやうかま其角の文あり桃の
はく舞しそい嵐雲を舞ふ梨

ふみ毛といけも鯨もくくふう那

参岑詩 花撲玉盃春酒香
元山院奇

ふのそくをまみうきおのつ
くおんお人うありぬをまふ

阿蒙院毛花子 来ふく梨馬よ鞍

法をやうく使もまうりるわく
くうほり山のおそくう那

愛方知酒聖貧覚錢神

花 子くく 以象海志らく飯

晋書曰魯褒字元道南陽人好學多聞以貧
素自著錢神論以刺之其畧云親之如兄
字曰孔方失之則貧弱得之則富昌無翼而
飛無足而走解嚴毅之顔開難發之口錢多

左近寄

若くは若のらちりもたえし
わくおまひーまうはしきの神

二見乃園をおまひる

うさかひふーかの心も浦の妻

山鳥集

さるまの池のさけよ東に船出で
なまのむとやけき千まらん

路草一草

氏衣みぬりおともおらん 雨乃衣

無方集

さくろ物雨をぬり来ぬおあひ
めふとも花乃路りやらん

伊加の國花垣の庄いせのつみ甫

都乃ハ重楼の斜一平路きまると

ひひ傳傳人

一十甲をばらむも梨み子孫のや

世傳物語をよ上東門院高良のハ重楼を
都くうのー柱んとそ人まをばらむー知せ
らるまの池のさけよ東に船出で
なまのむとやけき千まらん
尾を字附をうけーとのや

鶴の毛おろく移ささるる毛やよきの雲

朗詠云人披鶴氅立徘徊

飲のくさ花活千勢ん二升樽

杜律 酒瓶今已作花瓶

る臥る宿り移る移やるのむ

白氏文集紫藤花下漸黄昏

貫之

君りた少とと種てぬまそと春の花
たきうま時も去るはをけりけり

前途三千里のおもひ胸にぬこころの

り春やも春魚の目ハらるる

杜律 感時花濺涙恨別身驚心

与湖水情春

り春をけり人ときこり春

去来評曰湖水勝腕ととまを情せふ
たうりけりけり春の志うりけり

夏之部

卯月能未序をけりて旅の方を

夏之移れいまの風をけりて

石曼卿若無人捫風也

かゝるもあふ月をくもんの花さく

まはるくしあふ梅うりなほさくしあふけきあはる
さくさくさくさく風之の人を感動せしむる
風情のあはれはよもあを解情かきうか

館代より馬ゆて送るる此口より男

らん冊えさ勢よさくさくさくさく

らまゆる毛のさくさく

野を横る馬はさくさくさくさく

分

おとこいさや雪井あつたつた

約ひさしきさくさくさくさく

薩佛ありふ生さくさくさくの子さく

鹿野より死め阿含経説法うりさくさく

鹿王のさく経中あはる

知足亭の庭前あはる

さくさくさくさくさくさくさくさく

伊勢物語にその津に杜若いとおもさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
五文字さくさくの上さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

又詩 寫出芳蘭杜若情

山崎宗澄をいさめし近侍殿の
宗澄のまじりしをいさめしかきし
と遊しはるるをいさめし
しるし

有難きまじりしおせんうたへし

近侍珍山と宗澄の春と尋多し

宗澄のまじりしをいさめしかきし

春んとすはるるの津より宗澄は師
と脇をたきし

神桃隣新宅自画賛

宗澄のまじりし牡丹の花の春

梅聖俞詩蝶寒方斂翅花冷不開心

牡丹の春ぬくふは蜂の名は

杜律 穿花蛺蝶深見

招提寺より宗澄和尚の御影をいさめ

御影の首をいさめしをいさめし

宗澄のまじりし御影をいさめし

宗澄和尚入唐帰朝の時風波の難きをいさめ
うたへしはるる御影をいさめし
御影の首をいさめしをいさめし
はるる

日少人山少

あゝたゞりやも葉ももよみぬ日の光り

性靈集云舊二荒山空海登山の後二荒の
響をとりて日光山と改と云

須磨の浦一見は時

と満寺の影ぬい田とくくあふ言

莊子曰汝聞人頼而未聞地頼汝聞地頼而
未聞天頼也云云

唐詩 萬籟真笙竿云云

雪以岸寺の契り佛頂和尚の山居の

あしゆ釈 佛頂禪師ハ翁參禪の師なり
こゝに鹿島の混本寺子住人也

木啄兔 安電のくちめくまの夏木立

守屋の七魂木塚と化しと寺をけりて
りか説りよりて寺けりきり名りり

幻住庵 記り

先たのむ推能ふも何系も木立

美葉集

うゝ園のむうひの筆よ推すり
こゝに能ふの信りせんも

練負ふ人を志きり能ふは

山家集

よゝれ山こそを志きり能道うて
せりてあつて乃を志きり能人

高館

夏よりや兵つゝもつゝ多し能く何ぞ

杜律 國破在山河春城草亦深

陳陶詩 誓掃匈奴不顧身五千貂錦喪胡塵
可憐無定河邊骨猶是春閨夢裡人

小孩の屋浦みさる 嵯峨より

うねぬしや牛は子となる人の果

今あらん何おもいん牛の子は

うねぬしや牛は子となる人の果

四つひらきいもる深川はるを

うねぬしや牛は子となる

うねぬしや牛は子となる人を

杜律 白髮悲花落青雲羨鳥飛

這出よかひ屋のり下は蟾はる

鹿火屋 蚊火屋 飼屋

萬葉 朝霞鹿火屋之下余鳴蝦聲谷聞者

吾將戀八方

足日木之山田守翁置蚊火之下粉
枯耳余戀居久

六百番款合顯昭く

山吹花ありふれてとハ余ふかし
洞をく下りかりけりあくお祭
下も

らやえけり新能鯛中ら道かうる

六の勾虚粟の調也昔々の名吉は路ありかの
小町う鬮腰千りきくこのゆしたるを轉
たる作意とある魚

らみく洲千かくたあ光のや瀬田の橋

其角評云湖鏡一面千るえあけり
一橋のくえつをく感懐すかうくをく

兼頼公島も世々の五月雨千道はけり
あけり洲ぬきハ余ふ千眺を和ふ

笠一満亭いりこ五月能あうり道

延喜式神名帳奥州名取郡佐具郡神社

山家集みらの玉千両たりたり小室中ふ
常しう祭れとおほき塚り足へきり人同
くはく中將の清養きく中ききう事たり
かけしと中ねいけり又とひり道は
実方たけりあまきりうり
く祭らる方たもものきりきりふふおか
のきかのみえさうりう後千語ん
あもなきやうりおけり

おもせぬその名とけり
う神あうりきかみあけり

目能道や祭うり五月雨

田の畔子細るいけくの程少やとおもひ
しをりふこの柳乃かむおこをまうけり

田一扱くくそく立は秋柳う那

山家集

及の通乃ほあふうく柳うけ

志くくくくくく立とやうけ

新更への抄よ云柳落の涼くさあひうき

志けくくあもひくく時をくくくく

余情をほほきくくあめたるとたり

翁も世の余情をとりて志くくくく休みの

傍ある農夫の田一扱極く立らるまき時

くくくくくくあり可味く

奥州今秋白川くくく

早一苗少もあつれくくく日取うか

能因法師白川の秋風を文に詠む時秋の侍
わくれ指す影を日小晒し思ふくくく
たぐくくくかのあを人くく語りく

尾州舊友くく

世を旅く代うく小田能り毛と絮

李白序夫天地者萬物之逆旅光陰者百代
之過客而浮生如夢

高野大師云三界如客舍

羽黒山く後鶴の園

くく絮重行亭

先づくく山を出ぬ能く川茄子

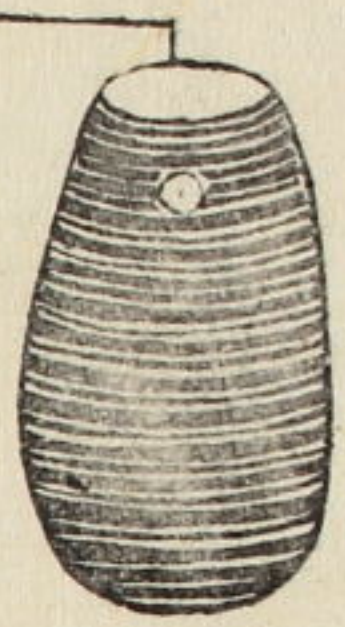
山家集

たぐひふのおりひおねみそけし
くすくすれふお乃おねふりひき

明石松伯

蛸壺やんつねまて夏月

長一尺余



口徑四寸余

蛸壺ハ備前焼の土器也口のやうりふ
穴あり此穴に繩を括きて魚の腸
ちくを餅子入て海中に沈めると
蛸をくくすなり

魚常迅速

やうて死なれりもさるんえい蝦のや

莊子曰螭蛄不知春秋

梅壺は女渚せいの啼きよめて

いとまてもけりるるも毛のくおもひと
ふひくくくくの渚にけり形一ま

梅

佐助能山中み

命ふ梨よりけり笠の下とく

山家集

年一くくくくくくくくくくく
いのちたりくく梨小お乃中山

尾花津清風

涼くくくくくくくくくくく

出羽奥州の方言あり形を移すとくくくく

お黒山

何梨くくくくくくくくくく

南薰を香るにむらひたる奇作に可味
をささうなふ松植るをんそ

とくくさやさくくや松の枝能飛

元補云

秋のやみそ秋のやみきをあらけり
さく秋言ふうらう川いこいふ

くくくを給るくく川くくく山家の外

山谷題東坡画竹石詩 風枝西葉磨土竹龍
蹲虎踞蘇苔石東坡老人翰林公醉時吐出
胸中墨

丈山の像より詠以

石川丈山ハ洛の儒士あり丈山平らな居り
二十一人の形と捨の詩仙堂を建てる人

風をまよはぬ減や禮もはくらのま

句意明なり

秋形主人の佳景お對して

山も庭も動さ入るや夏中な

詩 山影入門推不出月光鋪地拂復来

本間主馬の家名を移して

ひくくくくく秋庭や雪はくく

平岡主馬ハ能たまなり舞能手曲と中筆小
比くくく一作あり

夕うか能ふく能能後架よ紙燭よりそ

古今旋頭秋

くくくくくくく人もの時と花のそく

まろくくまのくわのくわ

又保民文教のまのくわのくわ
花の名のくわのくわ
のくわのくわのくわ
うくわのくわのくわ
うくわのくわのくわ

法燈祿云六祖大師家貧賣薪養母因往五祖求法

祖問汝自何来師云嶺南来祖云欲須何事師云唯求作
佛祖云嶺南人無佛性若為得佛師云有南北佛性豈然知
異器乃訶曰著槽廠去師遂入確坊腰石舂米云云
白選云ハ六祖の貧と云ハ可なり

孝由のくわのくわのくわ

孝由のくわのくわのくわ

中仙道彦根のくわのくわ

古今大のくわのくわのくわ

子其あよるのくわのくわ

爾葉集思子葉款
宇利波采婆胡藤母意母保由久利波采婆麻
斯提斯豊波由伊豆久款利下畧

之道のくわのくわ

孝由のくわのくわのくわ

白氏文集慎勿祖愚似汝翁
正成像鉄肝石心以人之情

凡そ世も経てん大と牛もかきと
ともつと魚らん彼非情とつと世仏
縁とつと神とつと芥介は罪とまふ
うもたらむまきとつとまきと

莊子云惠子謂莊子云吾有大樹人謂之樗
其大本擁腫而不中繩墨云云不夭斧斤物
無害者無所可用安所因苦哉

倅何とつと死とつと梨ははは松

端々乃は乃と義明あり

歡水亭雨中の會

勢勢とつと人もおつとや雨の秋

後成々々

此甲子生る秋を水とつとつと手成
かさつと都の人をいふせとつとや

浪の向や小息をいふとつと秋の海

山家集

まかをいふはゆまの小身捨つとつと
つとの浪とつとつとつとつとつと人

深川を庵

とせ成つとつと鹽とつと雨とつとつとつと

李夢陽詩 看石忽有詩攀蕉書其上夜来雨
打葉驚聞金石響

奇
さつとつとつとつとつとつとつとつと
青のつとつとつとつとつとつとつと

玉川みづあふおちけりなをききあはる

山家集

池乃面より影をけりあふうつゝもて
あうらうらうら女郎もさう都

しつゝさうら女あうらあふせま
しつゝさうらまぬあうらあ

葉のきりや蝶のほをさふなきもめと

詩夢断 燕妓曉枕薰

素性法師

あうらああうらあ白ひより秋のあふ
あうらあうらあうらあうらあ

夕鳥や秋のきりうらうの瓢う都

山家集

あうらああうらあうらああうらあ
あうらあうらあうらあうらあ

眼前

道々々々木槿を馬に吟神々々

唯是槿花一日榮

嘯山評しつゝ体行雲のゆく興象玲瓏

あうらああうらああうらああうらあ

まろくてもつれなきを番椒

古人評云貪多飽をまろくはるものをも
陳ととらり又云まろくても我情あつものをも

何事か人まろくも似まらばみ月

萬葉集

天の海雲の浪々川一月あり
わいの梅子くらたうくらと

嵐蘭の月五日ゆき北より七日の白きことよふ

えーやおらの七りあそと全結ころの月

嵐蘭の月五日ゆき北より七日の白きことよふ
あそと全結ころの月

更科山をい懐とらあ里より西南よ
横をい冷しくもあそと全結ころの月
しんあそと全結ころの月
海よりあそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月

えーいー海もあそと全結ころの月

お毛うもや姨ひりあく月の友

大和物語に信濃の玉更科とらあ里より男と
くうこのまの時年親を死あそと全結ころの月
のいふあそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月
あそと全結ころの月

善光寺

月影や四門四家もあそと全結ころの月

法華方便品云開示悟入分て為四門佛知見一

之為門云云

紫の菴とさげをのやーきと名あれ共
世ふこのも一た抱あを河りくる世ふの
東山よ住くる僧もる寺もる一西あり乃
源を流ひりるよーいふる住居よやと
す川あめ坊みあ川一ーり終ハ

紫のくみ月や紫のま阿孫院坊

山家集いあーら流東山よ阿孫院坊と
りー一人の産さるすまうりーんり終よと
とおかえんやよみり

紫のくるときくいのやーた名あれと
よふこみあーま住居ありり終

深川の末五かねとつあふは船一と

川上やこの河下や月み友

王子猷り戴安道を流りー山陰の興あも
やふな一

月見勢よ玉に終せんを刈ぬと

玉江のきんハ攝津越前兩國よりり産刈と
流あうとやり井畦あらと

夏州の玉江の産さるしと
あまあふらととととととととととと

此より越前玉江を流りぬり白の難波
の玉江と

武蔵中洲時仁ハおとをさる

政以去欲先とほとけり

明月能出於や一箇條

東鑑云鎌倉三代時執權平泰時貞永元年七月成敗式目五十一條撰云云

名月や池と免く架ておもすり

劉無競詩夜々池邊待月生ラテ部悲テ此夜易マキヨ天

雪をこり人を休む月見家

山家集

中くま時くさきのかたはるや
月をまてあはれつらりありし地

少ありの橋をこりて俗よほさす
とらほす納言の橋つらりて一條
あさむしきさきりふとせき

何さむしきや月見は旅の所とせき

催馬樂抄に浅水を越すの玉ありとせき

名月や湖水をこりて七小町

湖月の絶景小町ふ比興とがの象沼と西施平
形をせしむる象沼おもひ合とせき

名月や花のこりてええと路とせき

免の月子林下の露乃や田のくもあそ

二句支考評曰花有清香月_二在影
山家集

月をまじり言祿の重なるれり
さうらあふくまをり時由う那
詩めて祿の重を評西りのまふそ禁の旁を
評は二句は解情のまふり

三井寺此門たうそやふの月

賈島詩鳥窠池中樹僧叩月下門

糸くさくさ友をこころひみ月_二の暮

杜律計拙無衣食途窮仗友生
徒然まふものくさく友をこころひ

根を寺の隠さくやう人そて

深者そまらむ

寺をこころひ誦うる影を月とて

杜律欲覺聞晨鐘令人_二深省發

そらう外宮を詣はりて

二十日月明く千とせり杉を抱く風

外宮か千枝の抱とふらり今に枯亡たり
り柳のそら山田ありり林岸の沙文庫
のまはるより千枝の枝とて守るうり強くして
おはるふり

叶をみ新とらふ春をさす

西あ裨 千とせり月とて

家隆の子也... 井の田... 人の... 釈の...
 折... の... 紙... かく...
 教... け... け... の...
 隆...
 俊人の命を... 神の...
 ...

鶏... 鷹... 鷹...

... 鷹... 鷹...
 ... 鷹... 鷹...
 ... 鷹... 鷹...

閑人... 閑人...

... 閑人... 閑人...
 ... 閑人... 閑人...
 ... 閑人... 閑人...

遊... 遊...

... 遊... 遊...
 ... 遊... 遊...
 ... 遊... 遊...

... 遊... 遊...
 ... 遊... 遊...

鬼... 鬼...

萬葉集聖武天皇左大辨葛城王賜姓時
大御歌

たけのこをききまゝにたけさへそのまゝに
たけのこをききまゝにたけさへそのまゝに

芳野をめぐりてはたけのこをききまゝに

たけのこをききまゝにたけさへそのまゝに

詩 孤燈燃客夢寒杵搗郷愁

政諺云吉野の信守中法寺に在りては毒草を食り
此四五十年以來世文明未成て清信と名をえり

板の安らぎの様をたぬ風やに物風

萬葉集

板の安らぎの様をたぬ風やに物風

ら〜りハ〜と〜ハ〜と〜ハ〜と〜ハ〜と

猪毛と母を吹たてて風をた〜り

法性寺

秋のゆ〜りか〜りか〜りか〜りか〜り

あ〜いふすぬり〜りか〜りか〜り

江上の鶴をよめる風をた〜り

〜りか〜りか〜り

〜りか〜りか〜りか〜りか〜りか〜り

鬮體

山家集

〜りか〜りか〜りか〜りか〜りか〜り

た〜りか〜りか〜りか〜りか〜りか〜り

杜牧の早稲の残る小おの中山

〜りか〜りか〜りか〜りか〜りか〜り

馬子持て 残る月をきく 茶の煙

杜牧之早行詩 馬上續殘夢

羅山詩 坂道升降是早天 殘馬上不成眠

秋入の月をうねるのささとり

その後をゆくゆく少おの中山

富士川を通る千二のうりの松

みねの泣けり

猿を吹人 猿子 秋の風

杜律 猿聞實下三聲 涙 又云 巴東三峽巫

峽長 猿鳴三聲 涙沾裳

撰集抄 とうとうとてけり 猿子と空を仰て

持るいおろちなる心 地しを竹をてきり

おのほのほ同ちりもいんをみてさるる

かきつはるるそのまうりらるる

やうんうこあくうれれれ

此の詞花集にも入侍れ

何のつと日 是は 是も 秋の風

枕 双手の氣形もものき 秋の中は 夢

たるなる

座右の銘

人の短をとりあしあつた

己の長をとりあしあつた

後漢 崔瑗 座右銘云 何事なく風

無道人之短 無説己之長 施人慎勿念受施

慎勿忘世譽不足慕唯仁為紀綱畧
山家集

よしをふむいふをうかふ
たあうり物あわれりあふ

九つひ起つて月影七つう郡

白氏文集燕子樓中霜月夜秋未只為一人長
大和のむ叶たうらめ

海うや碧色くさむ叶たう

世説云張摩陲居願志家有苦竹數十頃張
於竹中為屋常居其中云云

世説のまをうらむをうらむ
き松山はまをうらむ

はまをうらむをうらむ
たうらむをうらむ

蒙求云晋孟嘉字萬年少知名為征西桓温
參軍温甚重之九月九日温燕龍山奈佐畢
集有風至吹嘉帽墮落嘉不之覺温使左右
勿言欲觀其舉止嘉良久如廁温令取返之
命孫盛作文嘲嘉嘉返見答之其文甚美
杜律 明年以會知誰律

はまをうらむをうらむ

句註未考

木田真

うらむをうらむ月と菊と木田之反

李滄溟詩 夾^{ササテ}戸^テ春風五柳斜^カ遠籬^ラ秋色醉
菊花南山只在^ニ茅茨^ノ外^ニ人道^ニ柴桑^ノ處^ニ士家^ト

九月九日乙州^ウ一^ツ樽^ヲと携^リる^ルれ^ト

菊の酒

蒙求云晋陶潜字淵明好^ク嗜^シ酒^ヲ九月九日
無^ク酒^ヲ出^テ於^テ宅^ノ邊^ニ摘^リ菊^ヲ盈^ニ把^シ而^シ坐^シ悵^々望^ム久^ク見^ル白
衣^ノ人^ヲ至^リ乃^チ大^守王弘送^リ酒^ヲ也即使^シ就^テ飲^ム既^ニ醉^リ
云云

范蠡^ウち^ヤう^フん^ノの^んと^をい^ハス

山^ノ名^ヲ多^クを^シな^リぬ

史記云范蠡^ウ逃^レ陶^ニ稱^ス陶朱公^ト其中^ニ子^ヲ得^テ罪^ヲ於^テ
楚^ニ朱公^ノ屬^シ長^男千^金令^テ幣^ヲ楚^ニ莊^生莊^生諾^シ然^ル后^ト

朱公長男^ヲ以^テ為^シ自^己赦^ス弟^ヲ固^ニ當^ル出^ル也重^キ千^金虛^シ
弄^シ莊^生無^ク所^ヲ為^ス也又^シ見^ル莊^生莊^生驚^ク云^フ若^キ不^レ
去^ル邪^カ長^男云^フ固^ニ未^ダ也初^ニ為^シ事^ヲ弟^ヲ弟^今議^ス自^己放^ス
故^ニ辭^シ生^ヲ去^リ莊^生知^ル其^ノ意^ヲ欲^シ復^テ得^テ其^ノ金^ヲ曰^フ若^キ自^己
入^リ室^ニ取^リ金^ヲ長^男則^シ自^己入^リ室^ニ取^リ金^ヲ持^テ去^リ獨^リ自^己喜^ム
幸^シ莊^生羞^ム為^シ兒^子所^ヲ賣^ル云^フ云^フ中^ニ男^ヲ遂^ニ死^ス楚^ニ罪^ト
矣

一^ノ花^モも^ろく^ハら^ぬ方^ノ菊^ヲ能^ク氷^ノの^郡

山家集

於^テ屋^ノ々^ノ人^ノ命^トと^シあ^らる^人の^心
ち^と乃^チ其^ノ人^ノ命^トも^もち^てか^つた^り

菊^ヲ能^ク氷^ノの^郡や^ちあ^らぬ^人の^心佛^ノの^心

白雄云佛^ノ法^ヲ能^ク氷^ノの^郡を^もち^てか^つた^りの^郡

杜律 親朋無一字老病有孤舟心折以時
無一寸故園平居有所思白頭吟望苦低垂
老去親知見面稀艱難苦恨繁霜鬢
杜子美う行多くも悔慨ありけりまををん
きふる

兄の字袋よりとりおき母のまゝ髪
おろしうきふりおきおのまひ
眉もや存りてとてまゝくはる

萬葉集詠水江浦嶋短歌

墨吉介還來而家見跡宅毛見金手里見跡
里毛見金手恠常所許念久從家出而三
歳之間介下畧

手平らうい消んあまの世つき秋の空

白氏文集 青雲俱不達白髮遽相驚二十
年前別三千里外行云云

枯枝りかき歩むはるのりり秋の空

杜律 空村唯見鳥落日未逢人

長月さらりあれも伊勢の辻まぬ
やうに船のりり

蛤の婦さういふの世り秋の空

山家集 京より見たりせむとてあつ
しうきしうてんの浦乃んまを
貝のりりおろしありり

冬之部

初〜く秋猿も小葉をひきまわり

魯三江詩 霏微雨帶風猿聲寒過澗
又李端詩 清猿帶雨啼

為家集

志くもり秋の末と葉のめはあ猿
糸との白く〜

冬ふわり〜

〜
〜
〜

禪酒を湖の磯を遠く〜

田螺を下は解乃を〜

牛の乳馬もぬま〜

新蓮の

牛の子〜
角あ〜

難波津や田螺は〜

百海王仁の

〜
〜

毛も終もふ〜

李白詩 白鷺奉三足 月明秋水寒

清氣得や油のや〜

上総國九十九里は清気集の家日蓮上人角
等の状なり〜

白氏文集 琴詩酒友皆拋たま我雪月花時も寢憶君

らく人中けりきんの中をとりはくらくひそ
せりくちをせりしやうくしりしりしり
あとりちりいあふふ満ちふ増はつとく

神いらしむしりしりしりしりしりしり
とくしりしりしりしりしりしりしり

おのつちちけり人々あんせふ少はせし
まへちけりは志あふの甲ふかたけりしり
今大津にちもくちちちちちちちちちち
老尼のちもふふふふふふふふふふふ
くち序おもくちちちちちちちちち

少將能居のちふしりしりしりしりしり

井陘抄云信寧親后の女二人ありはるる
藤原院のちけりしりしりしりしりしり
おのちちちちちちちちちちちちちち

おのちちちちちちちちちちちちちち
老後ちちちちちちちちちちちちちち
世妹井内侍も老後ちちちちちちちち
何れちちちちちちちちちちちちちち

此良之とさうけりしりしりしりしりしり

李蒼溟詩 北風湖上ヨリ来ル雪片大カ如鷺

法統ちちちちちちちちちちちちちち

殷富門院大輔哥

おのちちちちちちちちちちちちちち
たのちちちちちちちちちちちちちち

樽を浪さう川に腸水をおいあま

夜宿極浦之波青嵐吹而皓月冷全三

茅舎買水

氷若く偃臥の咽をささるるおひ架

莊子云偃鼠飲河不過滿腹全三

住はつぬか旅のさかたや置巨魁

旅の世にみ旅をささるるそのささるる

ゆゑんのささるるあもまをささるるささるる

曲のあつ旅館ささるる

う川に火やあつるささるるの氣は師

式子内親王ささるる

う川に火のちさるるおあおささるる
こまにささるるあつるささるるのささるるささるる

長頭丸の贅 貞徳童名也

おろふかやあつるささるるの丸頭巾

清浦ささるる

ささるるささるるあつるささるるささるるささるる

駿河定福寺に宗祇の自画像の像あり

う川に火のちさるるあつるささるるささるるささるる

海ささるる鴨はささるるあつるささるる

巔倒錯乱の格に杜律ささるるあつるささるる所謂

梧桐栖^ス荒鳳凰^{アラサス}枝香稻啄^{ツク}餘鸚鵡^{アザナシ}粒

長嘯^{チヤウセツ}の塚も免^{ヅク}くもの祈^{ノリ}た^ツる

長嘯子木下少将勝俊大岡秀吉親戚也洛東靈山宗隱居志^リる人なり頗奇人舉白集^ツり

つららたき辞

つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞

つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞

つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞
つららたき辞

孔子家語云仲由字子路見孔子曰昔由事二親之時常食藜藿^{ホトケ}為親負米百里之外親

没後南遊於楚為大夫從車百乘積粟百鐘願款為親負米何可得也

魚もみちるはるまきしんじくは

永叔云禽鳥知山林之樂而不知人之樂
惠子曰子非魚安知魚之樂

結句集ありきり年一のきり結句

年一これぬききりきり結句

山家集

常一うりもくをかくそおさかおれ
結句集ありきりきり結句

雑

うり結句集ありきり結句

新勅撰

結句集ありきり結句の結句
入る結句集ありきり結句

桑名集ありきり馬集ありきり杖集あり

の結句集ありきり結句集ありきり馬

より集ありきり

歩ありきり杖集ありきり馬集あり

古事記云日本武尊伊吹山を下向
の身新羅骨より杖集あり
より集ありきり

寬政十年戊午十月

俳諧書林

橘屋治兵衛
井筒屋庄兵衛
奈良屋長兵衛

四十八

主
津圖良

增註

柳青齋

仲芳

仕

太

侍書